

4-2【実践5】生徒・職員が参加して養護学校との交流 ～K高校の実践～

1 交流の経過

K高校では、平成10年度からボランティア・手話クラブの生徒たちが、同じ町内にあるK養護学校の寄宿舎を定期的に訪問し、寄宿生との交流を深めていました。その活動に刺激されて生徒会執行部の生徒達は10月に行われた養護学校の文化祭を見学しました。さらに職員の間でも、平成10年の10月には、職員の同和人権教育研修会に養護学校長I氏をお招きし、講演をいただきました。先生の熱情あふれる語り口と、テンポの良さ、時折交えられたユーモアが絶妙に絡み合っていて、先生の世界に引き込まれてゆく講演会でした。障害児教育を題材にしなが、先生からいただいたいくつかの指摘や提言が、教師の、更には生徒一人一人の人権感覚の育成・向上につながる内容で、大変示唆に富むお話でした。

- ・熱心で真摯なお話ぶりから、日頃の実践をうかがい知ることができました。
- ・K養護学校の実践は、障害のある人だけではなく、健常者にも当てはまるものだと思う。
- ・分かるまで付き合う、時間をかけることで、その子のできる力を伸ばしてやれることができるのだということ。40人のクラスでは忘れがちだが、どの子に対しても必要なことだと思いました。
- ・職員研修では毎年同様な話を聞き、そのときは何とかしなければと思うが、いつの間にか仕事に追われ、その印象が薄らいでいます。そのくり返しだったような気がする。I先生の話や聞きななで、自分は教師として今後どうあらねばならないかを考えさせられた。
- ・I先生のお話をお聞きし、あらためて教育の原点とは何かを考えさせられた気がする。先生方には当然苦勞もありませんが、その分だけ得られる喜びが大きいことだろう。(職員の感想から一部抜粋)

2 本年度の交流活動

平成11年度のボランティア・手話クラブの活動や、職員同和人権教育研修会などを受けて、同和・人権教育委員会の係から、今年度は生徒間だけではなく、職員間でもK養護学校との交流を進めてゆくことが提案されました。(以下は、平成11年度の交流活動)

- 5月13日 交流事業計画立案の会(養護学校にて)同和・人権教育係職員が参加
- 5月15日 養護学校の校内バザーを3名の職員見学
- 7月2日 養護学校訪問 高等部の生徒と交流会
- 7月17日 本校文化祭(谷翔祭)に高等部の生徒有志を招待
- 10月17日 養護学校の文化祭(駒の子祭)に参加し、物品販売などを手伝う

その他に、ボランティア・手話クラブの定期的な養護学校寄宿生との交流があります。

3 ボランティア・手話クラブの定期的な養護学校寄宿生との交流

年8回(月1回程度)、平日の放課後16:00~17:30(寄宿生の下校後から夕食までの時間)に養護学校寄宿舎(または体育館か校庭)で、ゲームなどをして共に楽しむ交流をしています。

昨年度、交流を始めた当初は打ち解けた雰囲気になかなかつくれませんでした。紙芝居を作って持って行って楽しんだりすることで交流のきっかけができました。お互いに「こんなことをしてみたい」という意見を積極的に出し合うようになって親睦が深まりました。いまでは本校の生徒の訪問を心待ちにしてくれています。

4 職員・生徒会の交流活動

(1) 5月15日 養護学校の校内バザーを職員が見学。

「……11時30分、明るい開放的な玄関ホールに、高等部の子どもたちの『いらっしゃいませ!』の威勢のよいかけ声が響きわたりました。陶芸・木工・手芸の3つのテーブルは、思わず『買いたいな』という気持ちが起こるように、その班の子どもたちが工夫をこらした飾りつけをしています。笑顔で応対する売り子役の女の子の後には、一生懸命電卓を打っている男の子。みんなが力をあわせて取り組んでいる姿が印象的でした。僕は陶皿とレターセットとメモ帳を買いました。買う度にアンケート用紙を渡されます。高等部の交流係であるN先生にお聞きしたところ、このアンケートこそが販売実習の目的だとのこと。『養護学校の子どもたちが作るものだから買ってやろう』という同情は、本当の意味で子どもたちを育てることにならないそうです。『本当にいい商品でなければ買わないよ』という厳しい眼で子どもたちの作品を評価してくることが、子どもたちを伸ばすことにつながるということです。この言葉にはとても考えさせられました。……」

(K高校同和教育通信第2号(A.T先生担当)より抜粋)

(2) 7月2日 養護学校訪問 高等部の生徒と交流会

本校からは生徒会長、文化祭実行委員長はじめ約10名が参加、養護学校高等部からは17名の参加がありました。まず養護学校の音楽室に集合し、文化祭実行委員長が17日に行う本校文化祭のPRをしました。自己紹介をすると大歓迎され、彼もポスターを広げながら「ぜひ来て下さい」と呼びかけました。続いて、養護学校生徒の作業風景のビデオが紹介され、その後2つのグループに分かれて養護学校の生徒に校内を案内してもらいました。生徒たちは恥ずかしがり、なかなか自分達から声をかけられませんでした。ビデオにでてきた作品が並ぶ作業場に入ると、作品の完成度に感心して自然と声が出てくるようになりました。最後に全員で写真を撮り、「また来るね」と約束して帰ってきました。

(3) 10月17日 養護学校の文化祭(駒の子祭)に参加

「雲一つない秋晴れの17日、養護学校の文化祭『駒の子祭』に行ってきました。養護学校の文化祭を見学するのは初めての経験でしたが、高校の文化祭と違って、とってもアットホームな感じがしました。……『見学』と書きましたが、今回は養護学校高等部の生徒たちが行う作品販売のバザーをお手伝いするのが目的でした。……高等部では、生徒たちが木工・陶芸・手芸の3つの班に分かれて作品を製作しています。朴葉模様の陶皿、箸置き、ひのきの箸、木製コースター、手漉き和紙のハガキやレターセットなどです。製作と同時に販売実習も大切な教育活動の一つで、その場が駒の子祭なのですが、裏方の仕事にK高生の応援があれば随分スムーズにできるのでは、ということになりました。生徒会役員で、7月に行った高等部の生徒たちとの交流会に参加した3年生を中心に11名（3年7人、2年4人）、それに生徒会顧問のI先生と私がお手伝いに出かけました。

バザーの始まりは10時20分。一時間ほどで売り切れるということで、はじめの30分は高等部の生徒たちが販売しているところを本校生が見学、演劇発表が始まって販売に関わる子どもたちが手薄になる後半の30分を本校生が中心になるという予定でしたが、手に商品を抱えて開店を今か今かと待っているお客さんの姿や、高等部の生徒たちの開店のカウントダウンコールが始まると、本校の生徒たちもさっそく一緒に開店の準備に入りました。結局最初から最後まで一緒に『いらっしゃいませ』の連呼。商品を包装したり、会計をやったり。日頃の授業の中では絶対に見られない(?)ような活き活きした表情で頑張ってくれました。

私も会計のお手伝いをしましたが、生徒たちが、ごく自然に声を掛け合いながら活動している姿にとっても感動しました。なによりも、生徒たちが楽しんでいることがとても嬉しかったです。わずか一時間くらいの交流でしたが、来年にもつながる試みになったように思えます。養護学校の先生方が気さくに本校の生徒たちに接してくれたことも嬉しかったです。最初は緊張していた生徒たちも、おかげで自分たちの文化祭のような気持ちで取り組むことができました。……」

(K高校同和教育通信第6号(A.T先生担当)より抜粋)

10月17日にK養護学校の文化祭の手伝いをしに行ってきました。K養護学校との交流は今日で3度目ということもあり、だいぶ慣れたところもありましたが、まだまだ知らなかったことや、学ぶべきことがありました。

養護学校との交流を通して感じたことがあります。それは、養護学校は、身体や精神に障害のある子どもたちが学ぶところだけれど、けっして悲しい場所ではなく、とても楽しいところだったということです。養護学校を訪れる度に、僕は心が楽しく、やさしくなれたように感じました。そして、何よりも、「自分もかんばらなきゃ」と思える、元気と勇気をわけてもらいました。(生徒H.Tさんの感想文)